

## 研究計画書

ゼミ名	奥田ゼミⅡ	チーム名	チーム古典派
タイトル	アダム・スミスはなぜ経済学の父と呼ばれるのか？		
テーマ群	f)歴史・思想		
メンバー	中村有佑 伊達佳弘 浜崎聡子 小田一貴 辻健太 田中魁人 白石悠 足達祐輔 藤田祐樹 下地陽介 楠本岳志 横山功人 山本謙也		
研究計画内容	<p>古典派経済学の創始者であるアダム・スミスは、別名「経済学の父」として、史実にその名を残しています。しかし、経済学者と言われる人が、スミスが知られるよりも前からすでに存在していたことは、経済史を学んだことのある方ならばご存知のことだろうと思います。その代表例であり、しばしば古典派との比較において述べられるものに「重商主義」と「重農主義」がありますが、後にこれらの学派を区分し、命名したのは他ならぬスミスなのです。では、スミスがこれほどまでに影響力を持ち、「経済学の父」と呼ばれるに至った理由は何なのでしょう？</p> <p>これを調べるために、まずは“スミスが生きた当時の学者が歴史研究の対象となる理由は、決してひとつとは限らない”ということを考えて入れます。具体的なものを以下に示します。</p> <p>①優れた著作（論文）を世に残した</p> <p>②著者自身の影響力などにより、内容の優劣に関わらない要因で著作が普及した</p> <p>③時勢や法律などの働きかけが、その著作に学術的な価値を与えた</p> <p>今回の研究では、発表内容は上記の①が主になります。なぜならこの研究は、現在のような学問としての体系がまだ成立していなかった経済学が、どのように学問として見いだされてきたのかを、スミスの著作「国富論」を中心に分析することで明らかにし、経済史へのより深い理解を助けることを目的としているからです。もしスミスの「国富論」が上記の②や③の要因で現在まで残っているとすれば、今回の発表は研究全体の一部を紹介するにとどまるものになります。しかし、その判断を発表そのものの批判とともに行なっていたらだけのならば、それもまた、経済史の理解への助けとなるでしょう。</p>		